

《益王重刻小蘭亭図巻（小本）》

——「蘭亭曲水図」の源流、展開、画題をめぐって——

中谷 伸 生

一般に「蘭亭曲水図」と呼ばれる画題は、中国絵画においては古い時代から描かれてきた。絵画の内容から言うと、「蘭亭脩禊図」が最もふさわしい画題名かもしれないが、画題についてはさまざま呼び方がある。すなわち、「蘭亭脩禊図」、「蘭亭曲水図」、「蘭亭図」、「曲水之図」、「盃流之図」などがあり、この画題から独立したものとして、「王羲之観鷺鳥之図」が誕生した。もちろん基本的には、すべての画題は同じ内容を意味しているが、描かれた絵画の図様を検討してみると、その内容は多様で、しかも、これら複数の画題とびつたりの絵画もあれば、いささかずれた絵画もある。本稿では、こうした画題の多様性と、同じく多様な絵画の図様を比較検討しながら、「蘭亭曲水図」の画題をめぐって問題提起を行ってみたい。

「蘭亭曲水図」の画題は、いうまでもなく、王羲之が墨書した『蘭亭序』から採られたものである。書の天才と称賛された中国の王羲之（三二一―三七九）が、永和九年（西暦三五三）三月三日に、現在の浙江省紹興市の南に位置する蘭亭において、四十一人（王羲之を含めて四十二人）の文士を集めて曲水流觴の宴を開いた。それは、三月最初の巳の日に水辺で禊を行う儀式であった。王羲之を中心に集まった文士たちが、

川に觴（盃）を流し、その觴が目の前を流れ過ぎていくまでに、詩を詠むことができなければ、罰として酒を飲まねばならない、という風流な宴である。つまり、これが曲水流觴の意味である。やがて、日本や中国において、この宴は蘭亭会として大きな広がりをもつことになる。この蘭亭の宴は、日本においても人気が高くなり、江戸時代には中国絵画の「蘭亭曲水図」の影響を受けて、数多くの「蘭亭曲水図」の絵画が描かれることになる。

王羲之の経歴を簡略に紹介しておくと、王羲之は、幼名を阿菟、字を逸少という。生没年は、三〇三年に生まれ、三六一年に死去したという説が有力であるが、三〇七年生まれで三六五年に死去した説もある。琅邪に生まれ、後年に会稽で暮らした。後漢の時代に遡る有力貴族である「琅邪の王氏」一族の出身であった。幼少の時から英才教育を受けたらしく、種々の要職を経て右軍將軍となる。そのことから、「王右軍」と呼ばれる。五十三歳頃に官職を辞し、以後、自由な人生を送ったと伝えられる。青年時代に王羲之は、能書家の衛夫人に就いて書を学んでいたが、その頃から早くも恐るべき才気を発していたと伝えられる。一族の中で王羲之の名声が高まるにつれて、王羲之を中心とする集団は、強固かつ大きな存在となっていた。

さて、「蘭亭曲水図」という図様の誕生とその展開について概略を述べると、明代の永樂十五年（一四一七）に明の王子（後の周憲王）である朱有燉（一三七六―一四三九）が、北宋の李公麟（一〇四九―一一〇六）の描いた《流觴図》（蘭亭曲水図）を翻刻した。李公麟の絵画とそれを翻刻した朱有燉の作品（大本と小本）は失われて、その正確な図様は分か

らないが、その後、朱有燉の後継者である益王（一五三六—一六〇二）が、万曆二〇年（一五九二）に朱有燉の作品を再翻刻したことが知られている。益王が翻刻したものにも大本と小本の二種類がある。ここで紹介するのは明代の益王が再翻刻した《益王重刻小蘭亭図卷（小本）》（紙本墨拓、縦二・三、横四六四・五センチメートル）【図111、112、113、114、115、116、117、118】である。この墨拓は杉村邦彦氏の所蔵品となっている。《益王重刻小蘭亭図卷（小本）》の図様に関しては、伝承を信頼するとすれば、李公麟の絵画をおおよそ踏襲していることは間違いない。

この益王による墨拓は、横五メートル近くの卷子形式の絵画で、その画面には、川岸に座して右手に筆を持ち、左手で紙片をかざす王羲之が描かれている。これまでの研究では、右端に描かれた蘭亭（水亭）の中の人物が王羲之だと断定され、定説になっているが、その根拠は示されておらず、必ずしもその人物が王羲之だとは言えないという意見もある^①。繰り返し述べておくが、蘭亭に座す人物は、定説通り、王羲之である可能性がきわめて高く、それを疑う根拠は見つからないが、あえて指摘しておく、この人物が間違いなく王羲之であるという根拠もない。王羲之であるという定説にとって、未だ説明がなされていないのは、この画面に、『蘭亭序』では王羲之を含めて計四十二人しか名前が上げられていないにも拘わらず、なぜ画面には四十三人も描かれているのかという問題である。その場合における解釈の論理としては、蘭亭に座する王羲之ともしき人物は、日本の中世の絵巻物などに登場する「異時同図法」という描写形式によって描かれたため、主人公の王羲之が一面面に二度登場

するのは不思議ではない、という説明である。それ以上の根拠は何ら示されてはおらず、この王羲之特定の問題は、わずかながらも、今なお完全に解決したとはいえない。この問題に関連して付け加えておくと、蘭亭（水亭）に王羲之が座するという図様は、清代以降になって数多く描かれるようになったため、われわれは、《益王重刻小蘭亭図卷》などの画巻から独立した「王羲之觀鷺鳥之図」によって蘭亭に座す人物を解釈するという「偏見」あるいは「思い込み」に捕らわれやすくなっていることを忘れてはならない。いうまでもなく、清朝以後に数多く描かれるようになった「王羲之觀鷺鳥之図」では、蘭亭に座す人物は、王羲之の特徴（持物）を示す、角張った被り物を頭に着けており、それは紛れもなく王羲之である。時代の変遷によって、蘭亭の王羲之は、必ず角張った帽子のような被り物を身に着けるようになった。いうまでもなく、その人物は王羲之である。

ところで、《益王重刻小蘭亭図卷（小本）》は、春琴筆《蘭亭図》【図2-1、2-2】の図様の源流であるが、時代を経るにつれ、益王による翻刻の図様は、基本的な構成を踏襲しながらも、次々に変貌していった。しかし、いずれの作品においても、蘭亭（水亭）を基点にして橋で締めくくるという構成は、縦長の絵画にされた春琴筆《蘭亭図》などにおいても踏襲されており、ここでは蘭亭の宴の故事を描くという最低限の物語の骨格が残された。「蘭亭曲水図」の絵画は、蘇州派に由来するものであったため、江戸の文人画家たちに人気があったと思われる。

さて、春琴筆《蘭亭図》の画面では、川を挟むように迫る両側の崖の形態や、彼方に遠望される山岳風景、そして、手前に生い茂る樹木の描

写など、全体としては江戸時代における文人画風山水図の典型となっている。文士たちはおよそ二十数人描かれており、『蘭亭序』が記す四十二人には及ばない。つまり、春琴には『蘭亭序』のテキストを忠実に絵面化する意図はなかったわけである。つまり、春琴は、何らかの「蘭亭図」（蘭亭曲水図）を見て、その図様に倣って構想を練り、独自の画面に仕上げたわけである。元々『蘭亭序』には次のように記されている。

又清流激湍有りて、左右に映帶す。引いて以て流觴の曲水と為し、其の次に列座す。

すなわち、『蘭亭序』に記された川（曲水）は、生きよいく流れる近隣の川の水を引いてきて（小さな）運河を作ったというわけで、春琴らの描く雄大な川とはかなり距離がある。春琴の《蘭亭図》では、構図と形態モチーフの特徴としては、多少とも急にも見える大きな幅のある川の流れが、遠方から手前に、わずかながらも流れ下ってくる印象を醸し出している。本来、中国における蘭亭の宴の川の流れは、『蘭亭序』のテキストに呼応して、比較的幅の狭い緩やかな流れの川となっており、『益王重刻小蘭亭図卷（小本）』に見られるように、幅の狭いゆるやかな水面を觴がゆつくりと流れていく図様であった。しかし、江戸時代の画家が受容した「蘭亭曲水図」では、中国風の川の描写は、かなり幅の広い川へと変貌し、やがて中国風の図様から離れて、それを日本的と呼ぶべきかどうかはともかく、多少とも日本の風土にあった観念的な曲水の描写へと転換していく。観念的という意味は、王羲之による『蘭亭序』

のテキストを忠実に写すことから離れてはいるが、いわばキーワードとしての図様、すなわち厨房、蘭亭（水亭）、王羲之、浮かぶ觴、下流に架かる橋のモチーフは確実に形象化されているということである。

絵画全体の印象としては、のどかな雰囲気の中、酒を飲み、詩を詠んで談笑する文士たちの優雅で楽しい宴ということであろうか。しかし、こうした印象は、この絵画を読み解いていく中で、かなり相違する意味内容へと導かれてゆかざるをえなくなる。つまり、春琴筆《蘭亭図》のイメージと王羲之の『蘭亭序』のテキストとの交流と離反という問題が浮上してくる。『蘭亭序』では、楽しい宴という雰囲気は掻き消されて、次の文章となっている。

悲しいかな。故に時人を列叙して、其の述ぶる所を録す。

この文章を踏まえて考えると、春琴と王羲之との間に横たわる心の交通と乖離を、春琴の画面はわれわれに伝えていると解釈できるのである。②もつとも、『蘭亭序』については、これまでも真偽論争が行われており、一九六五年の「文物」に郭沫若による「由王謝墓志出土論到蘭亭序的真偽」が発表され、偽書説が研究者間に広がったことは、あまりにも有名である。『蘭亭序』は、王羲之がすべて記録した詩ではなく、後代になって、誰かの手で後半の部分が付け加えられたという見解もあり、『蘭亭序』を「王羲之」という個人に限定するやり方で帰属させてよいかどうか疑問が残る。しかし、本質的に王羲之の手を離れた『蘭亭序』は、後半部の悲観的な文章をも含めて、日本で流布された事実を軽く考えて

はならない。いずれにせよ、春琴筆《蘭亭図》は、茫洋とした肉太の筆捌きを縦横に駆使した大作となっていて、本紙に深く食い込むかに思われる墨の線描は、後年の春琴に見られる切れのよい繊細な水墨画とはかなり異なり、墨は濃くて力強い。

「蘭亭脩禊図」、「蘭亭曲水図」、「蘭亭図」、「曲水之図」、「盃流之図」など、さまざまな画題をつけられた「曲水図」は、源泉である中国の「蘭亭曲水図」から半ば独立しつつ、基本的な王羲之の古事が、観念的にパターン化されて引き継がれることになる。その場合、テキストの「蘭亭序」に記された内容と、それを形象化した絵画作品とに異同があるという問題が浮上する。まず、これまであまり問題にされていないが、蘭亭に集まった王羲之を含めて四十二人の文士たちが、どのように描かれたかということだが、《益王重刻小蘭亭図卷（小本）》（一五九二年）の巻頭には、定型の図様「蘭亭に座す王羲之」が描かれている。王羲之は川べりに「右將軍王羲之」という傍題を伴って描かれており、左手で紙片を高く掲げたその姿と、蘭亭に座す王羲之の姿は、一九七三年四月に香港中文大学博物館が発行した『蘭亭大観』表紙【図3】にも採用された。蘭亭に座す人物には傍題が付けられておらず、厳密に言って、この人物が王羲之かどうかは不明である。定説は、この人物を王羲之として疑わない。杉村邦彦氏は、この蘭亭に座す四十三番目の人物が、曲水の宴を記録する「記録係」の人物であり、王羲之とは別人であるということもありうる、という意味深長な主張を行っている。やがて、川べりに座って紙片を持つ王羲之の図様は用いられなくなっていく、蘭亭の人物に王羲之の持物である角張った被り物が付けられて、蘭亭の人物が王羲之で

あることが基本となっていく。

しかし、そうした王羲之の図様は、清朝以後に定型化されるもので、《益王重刻小蘭亭図卷（小本）》では未だ曖昧なままである。日本にも《益王重刻小蘭亭図卷》の（大本）と（小本）が招来されていた可能性が高く、これらの図巻を下敷きにして江戸時代初期に狩野山雪が《蘭亭曲水図屏風》（八曲二双・随心院蔵）【図4】を描いたことは間違いない。山雪の屏風は、八曲二隻という珍しい形式の屏風に描かれており、山雪が横長の画巻を屏風に描くにあたって、八曲という珍しい屏風形式を用いたと思われる。なお、亀井和子氏によれば、山雪らに影響を与えたのは、《益王重刻小蘭亭図卷（大本）》であるという^③。加えて、山雪に続いて狩野永納が描いた《蘭亭曲水図屏風》（十七世紀後半）【図5】には、蘭亭の中の人物（王羲之）が描かれておらず、亀井氏によれば、それが永納の独創であるというが、なぜ永納が蘭亭に座す人物を描かなかったのかは正確には分からない^④。加えて、幕末頃には、土佐派を中心に各派の画家たちが、「盃（觴）」の流れる最も簡潔な「曲水図」を描くようになるが、その一例は、森徹山の《盃流の図》【図6】などである。

以上、幾つかの典型的な「蘭亭曲水図」について紹介してきたが、日本における「蘭亭図」の図様の受容とその展開においては、墨拓《益王重刻小蘭亭図卷》（大本・小本）が果たした役割がかなり大きいことが明らかになる。とくにその「小本」については、杉村邦彦本のみならず、一定数、日本に輸入されていた可能性が高く、その影響の大きさを見逃してはならない。

註

- ① この見解については、平成二十五年（二〇一三）に関西大学博物館で開催された「大正癸丑蘭亭会百周年記念——近代日本における翰墨の盛典——」（関西大学大正癸丑蘭亭会百周年記念実行委員会および関西大学博物館主催）の記念講演会での杉村邦彦氏の講演内容による。
- ② 拙稿「蘭亭曲水図——狩野山雪から浦上春琴へ——」、「東アジア文化交渉研究」第七号、東アジア文化研究科、平成二六年（二〇一四）。
- ③ 亀田和子『《蘭亭図》の図像解釈学——「楊模」と「庾蘊」のイメージを中心に』、『アート・リサーチ』、立命館大学アート・リサーチセンター、一九一二年、六頁。
- ④ 同書、十一頁。



图 1-1 《益王重刻小蘭亭図卷》杉村邦彦藏（部分）

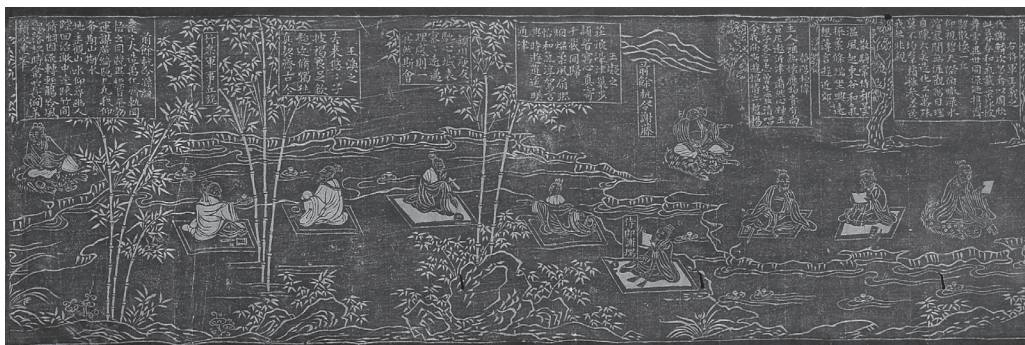


图 1-2 《益王重刻小蘭亭図卷》（部分）

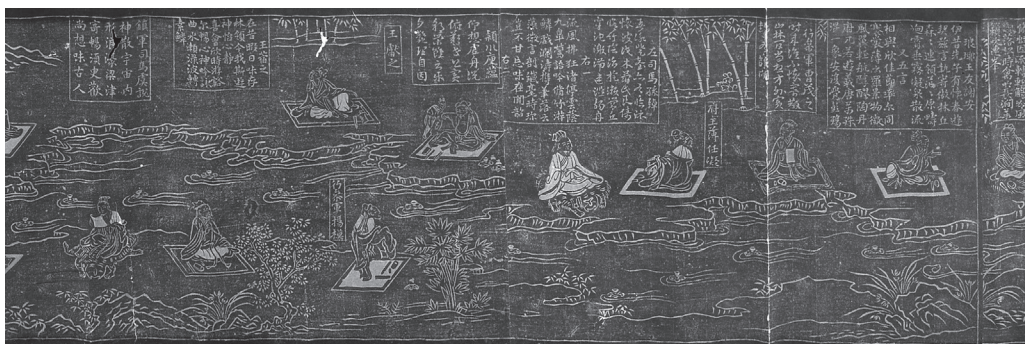


图 1-3 《益王重刻小蘭亭図卷》（部分）

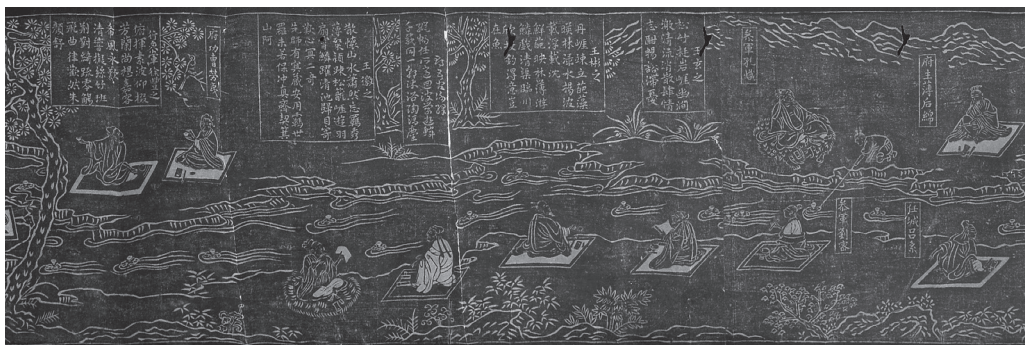


图 1-4 《益王重刻小蘭亭図卷》（部分）



图 1-5 《益王重刻小蘭亭図卷》(部分)



图 1-6 《益王重刻小蘭亭図卷》(部分)

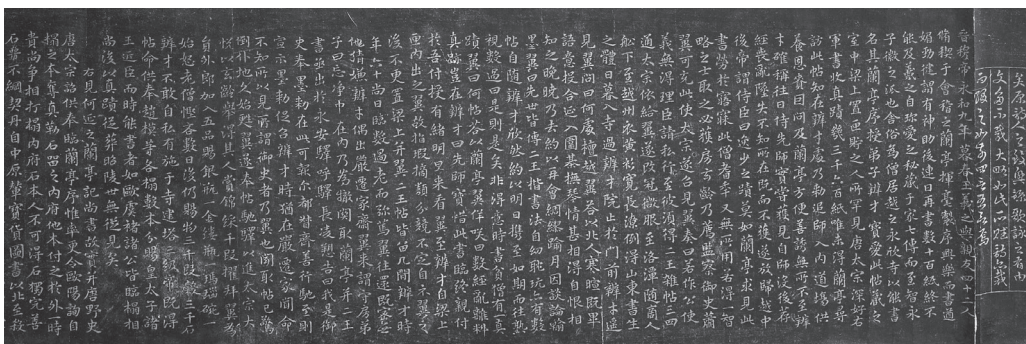


图 1-7 《益王重刻小蘭亭図卷》(部分)

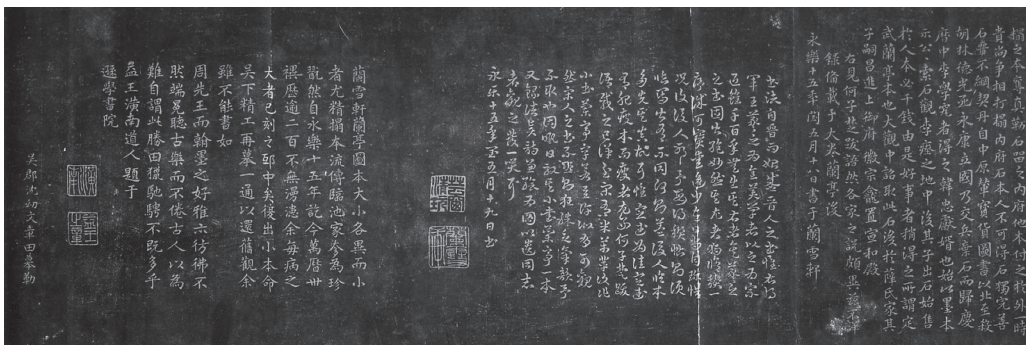


图 1-8 《益王重刻小蘭亭図卷》(部分)



图 2-2 浦上春琴《蘭亭图》(部分)



图 2-1 浦上春琴《蘭亭图》

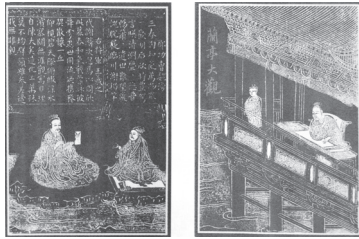


图 3 『蘭亭大観』
(香港中文大学文物館發行)



图 4 《蘭亭曲水图屏風》随心院藏



图 5 狩野永納《蘭亭曲水图屏風》(右隻)



图 7 《乾隆本蘭亭图卷》(18世紀)
東京国立博物館藏



图 6 森徹山《盃流之图》